大鏡　二

和書門
類
九四二〇號
函
架
八冊

内閣文庫
和書
類
九四二〇號
八冊
三八函
二架

131

内閣文庫
番號	和	9420
册數	8	(2)
函號	138	21

圖一三

国立公文書館
National Archives of Japan

大鏡巻之二目録

臣家

冬嗣大臣 五条后のてゝおとゝ
良房大臣
良相大臣
長良中納言 二条后乃てゝおとゝ
昭宣公 基経
時平大臣 基経之男

日本政府圖書

内171

左大臣冬嗣のおとゞは内麿のおとゞの三郎なり。

十六年。左の大臣にてうせ給ふ。六十二にてうせ給ふ。

よはひ。嘉祥三年庚午七月十七日。贈

太政大臣になり給へる。閑院大臣とも申し。此のおとゞは

おほくさきのことを十一人おはしまするなり。されどもさく

はきさきたちのかくれしをもち給ひし

たゞのみかどの御母后贈太政大臣長良のおとゞ

太政大臣良房のおとゞ左大臣良相のおとゞいひし

たゞしなり

太政大臣良房のおとゞは左大臣冬嗣の次郎なり。天安元

年丁丑二月十九日太政大臣にならせ給ふ同年四月十
九日従一位御歳五十四。三代の御門の御後見におはし
まし。天安二年八月廿七日より位につかせ給ふ同年戊寅
十一月七日摂政の詔あり。年官年爵給はり給ふ。貞観八
年丙戌関白にうつり給ふ。御歳六十三うせ給ひての後
忠仁公となづけ奉りて。又白川の大臣染殿の大臣
とも申し侍る。たぐひなきおとゞは文徳天皇は甥
太皇太后明子は御むすめ。清和天皇は御孫。御祖父にて太政大臣
准三宮位にのぼらせ給ひ年官年爵の宣旨くだり摂
政関白をもし給ひて十五年一そのはじめせしがおは
しましつかへ卅年大臣の位にて卅余年ぞおはしましし。

此殿ぞ藤氏のはじめて太政大臣摂政し給ふ。めでたく
御末々まで栄えさせ給ふもあそばしけることにておはしま
せば侍るめり。御ゐのおほきおとゞはまうちぎみときこえさせ
給ひて御心かしこくめでたく
おはしまして、おほやけをもとみせ給けることおはしますを
そめ殿の后の御前に花瓶に桜の花のさゝれたるを
御覧じてかくよませ給へるとぞ

年ふれば齢は老いぬしかはあれど
花をし見れば物思ひもなし

后を花にたとへ申させ給へるにぞ。かくれ給ひて
白川におさめ奉る日。素性がよみ侍りける

しは
　　ちはなみさおちて世をすてつきてし川名
　　きこえのよまれく此歌よしそあまきなれ
これ人へきこしめしたしめど御をやまもまぬきけ
内ぞ侍ぞなくいみしきさいはひ人乃子おはしまさぬ
こそくちおしけれ御あにのとの乃長良中納言のおとゞ
それ給ひこんおほきおとゞにまでなしたてまつり給へれ
まことにもおとゞの御ためにはおもひかけめどぞ此はすゑありてそ
今まさうへおとしまひめまゐらせ給くすへきことの御ために
侍りたまへけるとぞ

右大臣良相乃おとゝは御母此大臣よおほきおとゞ冬嗣大臣
の五郎大臣の位にて十一年贈正一位西三條右大臣也
にん浄蔵定額をはいのり此御門まておほしはべるよ堂よ
て験徳しゆゝしき人へなんなりひ大臣乃はゝ御かとに奉
よくきこしびをよりぞこの川乃おかの作をん安御のちのこかぐ大
納言常行とゝゆまうし御子二人おはせし正三位中
典薬助さ敏数さどのひとくちとかさくてやそ給ひまきさ
ふくはかりど思ふ人給ひけるの中納言敏とやいゝくれ
よし此て申えさせてまつり給へり此ちよき御ゆのやまの
まやとこしそおはしく侍也

一 贈太政大臣権中納言従二位左兵衛督長良は冬嗣のおと
ゞの太郎。はゝは白川大臣西三条大臣にはおはしましゝに
りて十二年。陽成院御ときはおほちにおはしますゆ
へに元慶元年丁酉正月に贈左大臣正一位。又贈太
政大臣。枇杷大臣と申す。ひろくひかれとも御子六人おは
しましその中に基経のおとゞすぐれ給へり

一 太政大臣基経のおとゞは長良中納言の三郎におはしまし
ひとゝころのおとゞこれはのむすめ醍醐の御時の后朱雀院
天皇ならひに村上二代の御母后にたちおはしましけれはおほき
ひとの御母贈太政大臣総継の女贈正一位大夫人乙春。陽成
院殿にはかけ給ひて摂政宣旨かうふり給ふ御とし
四十一寛元年御時仁和三年丁未十一月廿一日関白になり
世給ふ御年五十六にて寛平三年正月十三日うせ給へ
き御のこと昭宣公と申す。公卿にて廿年大臣位にて
廿年まてとさふ摂政せられし十年にて一のかみぞおはしましける
よのく堀川の大臣と申し。此小松の御時の御母この度此御
いとこなりとおはしましゝ。御せと小野の御門とまつりしくらん事
らせ給ひてことさらに御まゐらせやうやうにはかにしまいらせ
よ…ときおほかりしれど…れてまつりし摂政なりしをまつれ
ここにしましまのおほとゞの大臣やうしまやしひうしいなんこたち
のおほし御時の世給ふものにてまさし摂政へはなやかなる人

まう親王にてありきまゐらせ給ひけるにそむしやの御前に
きじのあしはかならずすうる事なるをおちにけりはいぜんのみこのおまへなる
をとりてまどひてそんしや乃おまへにすうるをいかゞおぼしけん
のおまへのおほとなぶらをやをらかいけたせ給ふこのおとゞそのをり
はまだげらうにて御ざのすゑにて見給ひけるにいみじうもせさせ給ふかな
とていよいよ見めでたてまつりて陽
成院おりさせ給ふべき陣の定にさぶらはせ給へる
とほるのおとゞ左大臣にてやむごとなくて位につかせ給はんの御心ふかくて
いかゞはちかき皇胤をたづねばとほるらもはべるはといひい
でたまへるをこの大臣こそ皇胤なれど姓給はりてたゞ人
にてつかへて位につきたる例やあると申出給へれ
さもある事なれどこの大臣のさだめによりてこそ
小松乃みかどは位にはつかせ給へれみかどの御すゑ
もはるかにつたはりこの大臣乃御すゑもつかうまつり給ふ
さるべくはちぎりおかせ給へる御なかにやとぞ思ひ
給ふるかくて摂政殿うせ給ひてふかくさの山におさめたてま
つる夜勝延僧都(しようえんそうづ)のよみ給へる
うつせみはからをみつゝもなぐさめつ
ふかくさの山けぶりだにたて
この御なんじやうの中納言の……(小字注記)
又かむつけの峯雄といひし人
のよみて侍ることしばかりはすみぞめにさけなども

古今によはくゆゑなくもありしを、御門にいへる河原院、閑院と
まうす殿原ひしとかの河原院をはさみべき所此あた
りまでくしかきりは世にて殿原は宇多院とぞ法皇の御
やどりたりしたまひしは其のちぬまでありける。むつまし
きおほきも人々のかの御供にさぶらひて、まうす殿
原とおはりもかくしましけるが、かの河原院は地形の体と
いひしは、ありし大饗の折から殿をしみ、此は車のやうに
なりそめる者の御車は川よりつきたりけるまうでこしは
あてしかのひとさきはしはまたひとはするきさにとめんとち
近く此はまことに川より御まちたくさんにめでたきこと
貴代御車の色もまたよろしく見ゆる。かへばふるとて西は俗
らぬ地とや、と見給ふるにあのきやす侯てそおはしき
まことにそれへめでたきほう四町にて四面に道ちまたの京中此
殿は冷泉院のことにてぞ思ひはべりしひつまとのをとゞ
なりまして小路さ給る此ところそいとくまうでくるれたの
照宣公の御ことは陽成天皇の御おぢにて、宇多此みかど
の御外戚二宮位にて、年官年爵とらせ給ふ。朱雀院なる
御むすめはかくのおほぢにて、おはしましゝよおぼしめしや
むことかしこまらせたまふ。みかどやはりおはして四人れ
んしぞさ太郎左大臣時平、次郎右大臣仲平、四郎太
政大臣忠平也。いとけしき年ひてこそ
なほそのかみのち此人々のかうかんさてしてぞされ

そこのかみゆゑかおほされけるにやきさて貞信公におなん
しまして又おほきおとゞにてちゝおとゞにかへし
この御よにありて給ひしは従二位して文治の五年此
君ゝ申てしう世給ひけるきはぎは御母いとあてにおはし
ます。この人よりの式部卿のみこ此はしまゝあんまそ君とく
を御なんとられくおきてまへりしかどそのこ人乃大臣にて
ら世よめの人三平と申き

左大臣時平此おとゞはもとつねのおとゞの太郎也
御母四品弾正尹人康親王の御女也醍醐乃御かどの御時
このおとゞ左大臣の位にて年いとわかくておはします
すかはらのおとゞ右大臣乃位にておはしますそのおり
みかどおほんとしいとわかくおはします左右大
臣に世のまつりごとおこなふべき宣旨くださしめ給へ
りしそのおり左大臣は御年廿八九ばかりなり。右大臣は御年五十
七八にやおはしましけん。ともに世のまつりごとをせし
め給ひしあひだ。右大臣は才もよにすぐれめでたく
おはしまし御心おきてもことの外にかしこくおはし
ます。左大臣は御年もわかく才もことの外におとり
給へるにより右大臣の御おぼえことの外におはしま
したるに左大臣やすからずおぼしたるほどにさるべき
にやおはしけん右大臣の御ためよからぬ事いできて

延喜のみかどのことく昌泰四年正月廿九日太宰権帥に
うつしたてまつりて都をながされ給ふおりのおとゞの御子ども
あまたおはしませしもみなちり〴〵にながされ給ひぬたゞ
ちいさき君ふたりはこれかれとくしのはせて御ともにあるに妻
しまでもみなとゞまりてながされ給ひぬなを
まかでなく〳〵かなしけれどもなどゝ心をはるけおなじうら
ちかきむらにすへておはしけれどもつらいかなしきはあとみぬ君の御
まへにはさらに参りすみ給ひしかどもひとりおはしてかなし
給ひしそのしもの日にはこの花をみてきこえしてあやしの
ありしたゞしま殿おのゝ花もてなさるし
なからまつりごとゝもよくかなしくまいらせしく
して涙まへの梅の花を御らんじて
こちふかばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春をわするな
又ていしの院によみてたてまつらせ給ひける
ながれゆくわれはみくづとなりはてぬとも
君しがらみとなりてとゞめよ
なをゆるされなかりけるをきこしめしてもかくれば
けるはさて御ぐしおろして出家せしめ給ひてよ
まことのみちをきはめんとてつゐにかひなき事をわびしらひ給
ひて御ことやことにあくがれておはしけるに心ざし
おぼされて

君がすむ里と人のおもはゞこそと読たくも
人くるまそてにゐもわかれし那
又これまでの朝はなれしつとそあはしの心まちとい
ふ事は味わひもなしめ給ひくじまちのいかんしろ
思へる事やかをあらんしてはくしめ給へる詩に
とうぜしり

騎長無驚時變改　一榮一落是春秋

はくしはおもてしはしはきそておもれりの心はそも
おだまきくゆかべをらくことは所くさりもとにを流
しらく

夕はまた此あはまた山にも又川あふのも

しきよろわこそしらる露とふりけれ
又霊人のうきてあらくしよ淺鉢のこんしてこれ
山ふかれとひゆく雲のふりくれ
仕申すとてとよ淺おりしめされぞうかなりみべし川に
くりかんろこ花そでをあのまのうへ
わか身一乗
うかんあかれのものそくはふかろ代のそこきてを
きくは花のまつ月をてしまらむ
まれおりしのあたいづしそこわりしぼうつ月日よりを
こそはてゝらし給ひめとにしそれあめれ海てころのでとと
わくつしきうえはさるを物のりてのかえうれ花も宿や詩

すゞ波さへゐてあるかすかゆふぐれうつりのかげはなれ
さまよひとかんきんへめもあやにほのかにくすだれ
ゆるきまゐりをとねむる絵乃ゆへさわらる人すゞしきむしさへ
いろくかなしみてあかめせばかんきつく書しにどき波さて
いちへくさへつく持をくりとくやうはのむつくる命と
そ漁くとにけうするや。さつげきなみぶとのこひつく書
うしはなふわぱはくりにしぬかんしきゃ次下のみうとわう
こみて翁らしまふ人大弐乃かどこゝつけいは待らるるまれさ
護なうへ乃うゝらしなぐのふしもあらん流らへしやられ
並永めよ文いとらぐ歓喜るといふ寺ありけるかれ
かくのいろ波きこしめして流くらせ給へて聞そへし

都府樓纔看瓦色 觀音寺只聽鐘聲
あまては文集白居易。遺愛寺鐘欹枕聽。香爐峯雪撥
簾看といふ詩よりまなびてあはれくしきんなんわと
いぞむしれそうせどもはやゝ文のかはくしてそ
九月九日菊花をはんしたまゆのくよ文ありり
おもくしありし州九月乃あまひ宴裏にて菊花えんあれ
しかるのおとくなくらしめ給へまげる詩をかへとこの
しるつくあんしたまひて流衣をまいり給へまし給。
はつしまてくびつしめ給へまとるれどはらんするふねを
どそのおかれめしいでてながらし拝給ひけるが
去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此　捧持毎日拝余香

あの詩のとかしこく〳〵かんじやされさふる
どもそもじさまもふかくおぼしめしの外にいりて
はつれあつめさせ給ひて後集となづけられまいらす又お
もくけんかきなさせ給へまいらせ候ものづからしまゐ
さりきこえしおはしましぎかなう侍まし一世
のせあておもはれなのなしく侍まりりそ大宰府のかさ
みなうはいはれられしとなひもかつらひとりわたく。
さうへこみえつくろすわいやうのまをてしじてぞら
くしてまつゆうつなうひとあて侍はまつれどおひのけ
のけすんごしきてはこれしてわきそれしたりまそれ
あれなきまくぶすこめく御になるなもとしきく人
く〳〵いそじきもこれものをも知給ひそるる
かいまの人なはなひあまかんやとうんしあへまじやうこ面
の御なりうちなりめて

あめのしたかはけるほどのなければや
きてしぬれぎぬひるよしもなき

かくてかしこにてつゐにうせ給へるよしみやこへ北野まそら
いのおほんとむらひさしめ給ひてかみとあがめ給ふそへ
あらはれの北野の天神とあがめまつる神なおもしまゐす
めでたき御やしろを御宮造せしめ給へとかしこくまゐのみ
なきがら給へあわれなくしれおそし御一所まで安楽寺とよばれ

てあやまりより別當司などなさせ給ひてひと御
ごらんじ御裏屋けらくあひくはくしめ給ひけり。
圓融院の御ときこれるまゝり給へてくかんじてうちさとり段
いとうなかりしくゑんもくまうりなりて文のあしはなし
まゐりてかくるかきのよ共うしいさゝ出物のすけてこれ
あらしくはあらなれてばよのかりさくかくゝふよの
うちくゝむしりのためるまうきりぞのりじいゝ法くる
文もやうすみんをろのしやむまのいさ海のありん知されい
とてそありけまぞれをこの出世のありけしたまつると
しそはやめかしりてあくて出共おもいひつくしよ其
うしてぞ延喜三年二月の乃との變二月二十五日まうせ給ひし

しそうし御歳五十九にて時平大臣時平乃御とくゞ延
喜九年己巳四月四日うせ給ふ大臣の
位まて十一年ぞおはしける。本院大臣と申しし時平乃
おくじ北のすめ乃女御をうせ給ひぬ。御孫の東宮をも一男八
条大将保忠にてもうせ給ひまさ。かくしこれ大ね八条まうすと
給へばうちよまゐり給すれどのとそるかなすふりぐ
おほされんかはまち井のいとおほしされくるとぞびを
川ちのされたそんで本うつ座ぞてやきいしみやうまほ弟
ますてくやらひ給へりまうあがるくるまでごついさえと
こびもへ川しおかきあるずばゆよわすまわて御車ぞ
ひますけとし嘆給ひる。おまうかなつかよよいな聞

こしらへよふをみてとてものりて人乃思ひなれども
そぐいひは人給しめどものこはれぞうしやすくひつき給ふ
てざまくれいのわし給ひしまぼろしこやうのさ
きやう申くらかこめでくせさ被給ふなり。所謂宮毘羅大
将とうちあげ申ら給ふれどくつひるとよむ也なりと聞
えあるなくくびやうはやがてたゞいわ給へたゞ。經乃もん
といふ中しまをちかき抱のけはさわこめられ給へるなり
きこえあやしくはうちあけ給ふなりしさるべきことならん
ひをすぐりのはおわりつしごとふ給ふ事也。その首乃敦
忠中納言もうせ給ひまさぞよのかめでたき琵琶上手
給ひてらしよもよろくれ給へまさぞくれ給ふ御ひらはあき
ひかどあくかわりは。博雅三位乃ちゝなるみあふてまいり
まゐれば御ごろの法あそびいらぐまねぬとおもひくめされ
こまのるとかんておまうさき人くはよのなを思ひそあやしき
是般忠中納言乃いませしかさがく数みちはけ三位なん
おなじけとんじめおはりてよの大事はおもしろべきな
ものかたとはおもしなしごめしげとその給ひ出さるそん給
よ見んやすれまゐれ給ふかすがらに院乃おとしれ御めでたし
かくしてこ三四人なわり。なに院のいうせ給ひまさぞ中将のこゝぞ
すいとこそのとかくさし。後なと出でげあるこう式部にてなん
きこえ乃えさまで。母宮乃女御の法はしまして。そのとうし被
給ふのすきばとなをうしくおなせし。そればと並の前

たゞ給ふ大輔うへん着しのかんむりをやめて送りもし給へる
そらにとぶ鳥のなきをもなくはゆかんつゝむ君ならなくに
夢にしもふかくぬすまれつゝの物しいま
清慎公 大輔
忘れしもはかなくさしへくをおもふさき
ゆめ斗ちゆめも夢とかへしけん
太上乃宰相のむすめやその後朝の使よ敦忠中納言
おり給まてしし給ひけるをさかりせ給ひてのちは中納言に
おもひたまへりけるをとゞこざりすくも思ひながらいつか丹後へ
菅原文範乃民部にそわりまゐりかんまて敦乃ゝまうし
まてこゝまつくわるをとゞまれはへ命みすくはそんなわたりのある
らにはさかへたまふ後君はしは文範まそおもひ給らんするを
の給ひけるをとおる事しきるけとらへ給ひきれしおまう
ろわてきこえしよふたろへ給ひしほどの給ひけるあらまし
こりよはいへいはすするそうしたゞあの君をもち代は中
よは大納言源昇卿は女乃むすめ顕忠おとゞのかん殿
侍大臣まてのほり給へるかたは位まても六年ありてせしつ
とずさしおぼすさやおりきんおくあわさ給ふ事
なれうちたりてもち大臣の作法と始まるまのひ給さんは嘘
まさ乃おわりのておほろ事まで作るれまいらしにぞまく
をおかうふぞそまひもしあせんいひひ給ひとすかぜり
うろ代もくふまでぞ給まりひし出来 しほへ人つず

く捧給はいかめしき事又なんさらにまうしひとへにては御ぶせまうさ
は霞殺のゆえんにしけまかいさかとしてごおけはちかき
きむさはつゝきてあま作たまいし仕丁法しとめてあそれ
ゆかりてまいりさくのきこえしぞへしてもうけさせ給ふ
ぞされおきて捧給ひてはまつりしりすまにしけるぞ給め
し拗いうながらしくほしなどめもまのなむぢよへてたべ
はからひけりしてぞまいるどもなくもたしきこゆとらす
あるつくそれのひとせけるなるん悲しく給ひしもさるべ
き事共おほかのはさとはだんどもおろとめぞて大臣にもまる
なんし給ひしぞなくもそてまつし給ひしまやはおほくこれ
こそはおほくの中に六十余まてのよはひしぞ分一のひと

無き大饗し給へなんあるらんとぞいへる。この大臣と
まうし是よりかれ此君たちこれ世にまさりたる給へ人なり
こちたかてもまつりことはおもしろずこの御殿乃御なりけき
ものさらんあるべき顕忠大臣の御子は元亨乃事わらく
おもくせられしの御子通今は三井寺乃別当心誉僧都山階
寺権別当扶公僧都なとこのきみたちにてよろそ拗
給ふめまさりあつまて後中納言法師のさぶらひまふこれなくしを
あかりに無清作るめでたしの君とらやゝしくれきかん
出家して僧正しうしやうしの入しことりそのひとの御子なりと
いかゝし乃文慶僧都まて敦忠公の御むすめはひいかん
大納言乃北のかたにてかし給ひしぞおほさまりかきなる

事とやしところひとすゑへましはことよろぶれと
との御せちえねせぬ遊ず海や海とさまし内
まづはいかくしくれうしぬしきなる物延乃世阿
乃作法をもてつめさ猿楽ひしかども色善をえと門弟
世阿つぎなしよるの観世のとやぶりの海はさうらく
のあとれかよめで面をなしてぞよまいの阿弥ひき
観上かさふひ阿弥もとかんりどこ至とみえうれはらんして
御覧しきいとおしくなしせ阿弥ひき識事とあし
てせうん乃色善世のさむしきしろたれたとての一の
人といひのうし美麗あとのかまそへまいまな便る記
これありまよみやくふ海ろれのつへきよしむせしと

おせくれら体はゞあ阿弥たるるもいのあるさうすめつとお
うまといはほうへられどゞそのおそてもあくとくちらくの
事とやしくまこてどゞりかへしくれどころきてかしこまり
うあ阿弥いれて法阿弥のこさ法まりすゝとせのし阿弥ひて
いそ法まうりいで阿弥へでゞ古今のどものゝおやしとぞ部て
るんばゝて左役乃かへりと一月猿樂をてぞんきのとよ
もいで阿弥そ波へるもの(?)まいるかともたぐむたへりたちともま
まとはとてあてる世阿弥のさうり善あさわしよてそこゝ
事代色善あたいのしきこえてもまんしりでちょくいつき猿
ゆりしうとさてしろわそえへおもしむとてかんこうとく
たかのあんはくさて世阿弥へあまけのあとゞかうさいなつ大どもすつつれ

かしこそうえ給んせうと披たまのつかわりまゐるよし人々に
せ給ひぬまてんすこし猶あまりしそかんしられけるにや御かと御感あり
よろこはせ給ふおほせ給よりあはひさこそうるんかうす御ゆるせられ
まろれたひたひ悦するにやむなくしてせうりよし給ふて御たち
ひいつくしけ給ひしてあの君とくたはし給ひてとかましいふ
ほんのみわりとなけきさ給ひまいるにめてしけと御悦ことふ
もなく給ひはその君のまいりかひたりしてかのおほ事をとゝめ給
らんとやけまてひかひとおわするまじしきまゐらすにめしてを
おむとの給へさま披さ給はとたく給ひせりはしてきたり
なきてあしとききこひてしくなくこめおくまめし給はすまことあ
史論ひたひにきんまてあかきりえんそていゐらすなる御ふるまひ人

てあの君たにむてまゐるとてはかられかやうに御かたし
てまゐりけるよたとひ御かんをそえとしすてしまた
かきそてやかてましひとくさはとちるおほふせく
ます披やとこふいひやまいら給はさりきれたひたひき
こそすかりて我おとひのかのまゐりけうてうち給ひ
ろれはまこかのかくりうりし世語そていしおきそし
く神なりひとつめきせんのやうにそんなおちかくしまいると
見てしけれは白河院の君とたちとめにうけていきてもて
まうしきよいそまの給ひしかあまた神とうかゝし給ひて
とこちあの世くりしきれとらうをとき給はかたしい
てうしけくとはあるへきとはのしをやめまてのほりける。

一ど渡志かましせ給へりけりとぞよの人申あへりし。
およそこれまで此物語どものみぎりに申しまゐらす
きおもしろき事のかぎりをつくしはべりしかど
しばらく人とゝめをき候給へるなし

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan